

セシリア・B・ガルーチョ氏
フィリピン教育演劇協会 (PETA) 代表

振り返ってみると、この30年間にわたるPETAと日本の皆様との協力の歴史の1コマ1コマが鮮やかによみがえってきます。

1979年にインドで開かれた「社会およびコミュニティ発展をめざすアジア会議」でPETAと劇団黒テント

が出会ったのが、日本との交流の始まりでした。この会議でPETAは演劇を用いた創造的な教育についての報告を行ない、演劇がいかにして人々のエンパワーメントに効果を発揮するかを示しました。このとき劇団黒テントとPETAは、コミュニティ（地域社会）の発展に寄与する「ピープルズ・シアター」をめざすという目的意識が同じであることを認識し、その後さまざま機会を通じて友情を育み、その輪をアジアのほかの国々へも広げる努力を重ねてまいりました。

なかでも特筆すべきは、95年に劇団黒テントとPETAの俳優、ディレク

ター、そして技術スタッフなど総員で手がけた「喜劇・ロミオとジュリエット」でしょう。ジャパンファウンデーションの支援を得たこのプロジェクトは、着想の段階から公演まで実に3年間を費やし、97年から98年に両国で上演されました。

また、PETAは、演劇グループ以外にも、たくさんの日本の人々にそのユニークな教育手法を紹介してきました。たとえば、阪神大震災の被災地で、教育関係者、主婦、平和活動家、学生や子どもたち等を対象にワークショップを行なってきました。これらのワークショップは、まさに「芸術」と「日常生活」にまたがる重層的な文化体験の場となりました。

PETAの芸術活動に触れた人々が、今度は人々の側から芸術に新たな息吹を吹き込んでくれる。私たちの活動プロセスにはそうしたワクワクする楽しさと喜びがあります。創造的コミ

ュニティには、常に、人々の心に触れ、社会をよい方向へと導くような「物語」が展開します。

この賞は、PETAにとって重要なタイミングで頂戴することとなりました。というのは、PETAは今年、その38年間の歴史のなかで初めて、400席、2つの教室、そして事務所を備えた常設の「シアター・センター」という「わが家」を持つことになるからです。このセンターには、私たちがこれまで一緒に頑張ってきた、日本の皆様を含むすべての人々の物語と精神が詰まっています。

今回の賞は私たちだけのものとは思っておりません。皆さん、そして私たちと同じビジョンをもった世界中の仲間たちとで共有すべきものだと考えております。そして、この賞は、これからも私たちが互いに協力、理解、そして連帯していく力を与えてくれる証明書にほかならないのです。(原文は英語)



演劇を通しての民衆啓発やコミュニティ形成への取り組み、および日本をはじめ多くのアジア諸国の芸術・市民団体とのコラボレーションの業績を称え、形成への今後の貢献を期待して、国際交流奨励賞・文化芸術交流賞を贈った